

東日本の戦国時代

目次

<はじめに>

- 1, 足利尊氏の鎌倉府設立
- 2, 戦国初期時代
 - ① 享徳の乱と戦国時代の始まり
 - ② 長享の乱一両上杉氏の抗争
- 3, 北条氏（伊勢氏）の登場
 - ① 伊勢宗瑞の登場
 - ② 伊勢氏の急成長一初代宗瑞、2代目氏綱時代
- 4, 東日本の今川・武田・上杉。北条体制
 - ① 四傑時代の到来
 - ② 甲相駿三国同盟
 - ③ 三国同盟の解消と越相同盟
 - ④ 越相同盟解消で甲相同盟
- 5, 四傑死没後の四氏のその後
- 6, 四傑の中で誰が一番強かったか

<まとめ>

<はじめに>

戦国時代は室町時代の中期に起こった応仁の乱（1467～1477年）以降を言うことが一般なのですが、関東はそれ以前から乱れ、京都の足利将軍（室町幕府）の指令が行き届かない地となります。

5代鎌倉公方くぼうの足利成氏しげうじと関東管領かんれいの上杉氏との決裂は決定的で成氏は鎌倉から逃れて下総しげうじの北端こがの古河（現茨城県の北端）に本拠を移します。以後古河公方こがくぼうと言われます。関東は内乱状態（享徳の乱の始まり－1454年）になります。これをもって関東は戦国時代の突入と言われます。

京より新公方が派遣され、伊豆ほりごえで堀越公方を名乗ります。古河公方は更に

小弓公方こゆみとに分かれます。

堀越公方、小弓公方、古河公方、上杉氏（関東管領家）が滅ぼされた後、関東を中心とする東日本は武田氏、上杉氏（長尾氏）、北条氏、今川氏の勢力争いが展開されます。

武田氏の本拠は甲斐国かい（山梨県）で中部地方、上杉氏の本拠は越後国（新潟県）で北陸地方、北条氏の本拠は相模国さがみ（神奈川県）で関東地方、今川氏は駿河国するが（静岡県）で東海地方ですが、互いにどこかで国境に接しています。

ここでは戦国時代の初期（室町時代）から説き、後期の勇将武田信玄たけだしんげん（甲斐・信濃）、上杉謙信（越後・越中）、北条氏康（伊豆・相模・武蔵むさし）、今川義元（駿河・遠江ととおみ）の活躍までのおおよそを語ります。

いずれの仁も天下をとれませんでした。が、勇将、智将、戦術家、戦略家であり、治政にも優れた仁として歴史に名を残しました。

後掲の「戦国関東の年表」を参照ください。

1、足利尊氏の鎌倉府設立

そもそも足利尊氏は天下を制した時に本拠地を京にするか鎌倉にするかで考えます。

鎌倉は武士政権の発祥の地であり、鎌倉の北条政権を引き継いだとの証あかしのために、又関東に住まう武士こそ足利家の基盤であるとの認識から、鎌倉に本拠をも考えました。

しかし京を安定的に制圧し続けることが政権の必須であり、吉野に後醍醐天皇がある限りは京を離れるわけにはいかぬとして京を本拠に決めました。

しかし、京で軍事行動が必要な時は関東の武士たちを統率して京へ進軍させる機構が必要との考えから鎌倉府を設立し、その長に尊氏の次男の基氏もとうじを赴任させました。鎌倉公方と称しました（1349年）。

次席には足利氏の外戚（尊氏の母親の実家）であり、家老格の上杉氏を関東管領かんれいの職につけました。

関東各国に守護を配置し、その上部機構として鎌倉府があり、守護の指揮権を持つ最高司令官が鎌倉公方足利氏で、副司令官が上杉氏です。

二人は世襲で役職を引き継ぎます。

関東の軍事司令官であり行政官であります、関東管領と守護の人事権は京の足利将軍が握っています。

後醍醐天皇の南朝が滅びても京が本拠で鎌倉府の体制は変わりません。

ただ時代が進むにつれ代々の鎌倉公方くぼうは自分も将軍になれる家筋だとの意識が出て、本家の将軍家に反抗的になります・

鎌倉公方4代持氏もちうじは関東管領上杉憲実のりざねと仲たがいし、上杉氏を支持する6代義教将軍よしのりに反抗して負け自刃します（1439年）。

義教将軍死後、関東公方に自刃した持氏の子の成氏しげうじを就けたことで鎌倉公方家の足利成氏と関東管領家の上杉氏の争いは再燃し、関東は内乱状態になります。戦国時代に入ります。

ここで当時関東とは具体的にどこを言っているのかです。

武蔵国むさし、伊豆国いず、相模国さがみ、甲斐国かい、上野国こうずけ、下野国しもつけ、下総国しもふさ、上総国かずさ、安房国あわ、常陸国ひたちの10カ国です。

現在の県に焼き直すと武蔵国は東京都、埼玉県、神奈川県の川崎市、横浜市あたりです。伊豆国は静岡県の伊豆半島、相模国は神奈川県の西部、上野国は群馬県、下野国は栃木県、下総国は千葉県の北部、上総国は千葉県の中部、安房国は千葉県南端、常陸国は茨城県におおよそ相当します。

これが鎌倉公方の管轄範囲です。

奥羽地方は鎌倉公方管轄になることもありますが、外れる方が多いです。

それぞれの国の守護と戦国時代に入る前からの有力領主は次の武将たちです。守護は有力領主です。

武蔵国の守護は上杉氏（関東管領）で有力領主は上杉氏と鎌倉公方直轄地。伊豆国の守護も上杉氏。相模国の守護も上杉氏で有力領主は上杉氏と大森氏。

甲斐国の守護は武田氏。上野国の守護は上杉氏。下野国の守護は上杉氏で有力領主は宇都宮氏、那須氏、小山氏。下総国の守護は千葉氏で有力領主は千葉氏と結城氏。上総国の守護は千葉氏で有力領主は千葉氏と武田氏。安房国の守護は上杉氏、常陸国の守護は佐竹氏で有力領主は佐竹氏、小田氏、

^{だいじょう}
大掾氏です。

関東管領上杉氏の守護国が多く、鎌倉府での勢力の大きさが分かります。

守護の配下に何十の領主（国衆）がいます。彼らは守護の被官（外様の家来）といわれますが双方の絆は深くありません。

守護も国内に領地をもった領主の一人です。

鎌倉公方直轄地は武蔵国中心に各国に分散していて面積は大きくありません。

これが室町時代から戦国時代に入る頃の関東の情勢です。

2、戦国初期時代

これより東日本東の戦国時代を語りたいのですが、戦の数が多いこともさることながら有力領主や武将（国衆）が敵同士になったり味方同士になったりで、同盟を結んでは解消して又結ぶのでややこしい限りです。

そこでここでは、東日本の戦国時代における個別の戦いの細部には入らず概括を見て筋道を追うことにします。

① 享徳の乱と戦国時代の始まり

鎌倉公方足利氏と京の足利本家の将軍との対立に加え、鎌倉公方と^{かんとうかんれい}関東管領上杉氏とが対立し、将軍が上杉氏に味方し、関東は騒乱になります。

^{きょうとく}
享徳の乱の勃発です（1454年）。

京の足利^{よしまさ}義政将軍は上杉氏に味方し。駿河国（静岡）の今川氏を出動させ、上杉氏と共同して鎌倉公方と対戦します。

上杉氏・今川氏（義政将軍側）連合軍が勝利します（享徳の乱）。

鎌倉公方^{しげうじ}成氏は本拠を鎌倉から下総国の^{こが}古河（茨城県北端）に移します（1455年）。

古河公方と言われるようになります。

義政将軍は自分の庶兄の^{まさとも}政知を鎌倉に送りますが、鎌倉は治安が安定せず入れません。上杉氏支配の伊豆の^{ほりごえ}堀越に拠点を構えます。^{ほりごえくぼう}堀越公方と呼ばれるようになります（1457年）。

上杉氏の内部では本家関東管領家の山内上杉氏やまのうちと一族扇谷上杉氏おうぎがやつとそれに越後守護の上杉家に分かれていました。(山内、扇谷の名はそれぞれ鎌倉の住まいの地名です)

山内上杉氏ともう一つの一族越後上杉氏(越後守護)とは一体ですが、山内と扇谷とは対立するようになります。

(越後は鎌倉府の管轄外の地です。後年上杉(長尾)謙信が支配します)。

そして関東中心部は山内上杉氏、扇谷上杉氏、古河公方と堀越公方の四氏に分裂して関東を支配することになります。

関東の四氏の支配地域は次の通りです。

山内上杉氏は武蔵国の西半分(東京都と埼玉県の西側)、上野国(群馬県)、下野国南端(栃木県の南端)、扇谷上杉氏は武蔵国の東部(東京都、埼玉県の西側)、相模国(神奈川県)、古河公方は下総国の北部(茨城県の北端、千葉県の北部)、堀越公方は伊豆国(静岡県の伊豆半島)と分かれます。

その外この四氏の支配が及ばない関東の地である甲斐国は武田氏で、下野国は北部が那須氏、中部が宇都宮氏、上総国・安房国は武田氏、常陸は佐竹氏、鹿島氏・小田氏の支配です。越後は関東圏ではありませんが越後上杉氏(山内上杉氏と一体)の支配です(上総の武田氏と甲斐の武田氏とは平安時代の先祖は同じですが当時行動は全く異なります)。

四氏にとって支配地域の拡大のためには支配地域とそれ以外の関東の有力領主(国衆くにしゅう)を味方に誘いこむことが大事です。

支配地域と言っても各地の国衆(小領主=武士)が味方して成り立っています。大きな国では80氏位、小さい国でも30氏くらいの国衆がいます。

鎌倉公方の直轄地は大きくなくほとんど守護の領地と国衆の領地です。国衆に支えられての支配でした。

戦国時代以前の室町時代は、鎌倉公方—関東管領—守護—国衆(被官)と統制秩序はありましたが、国衆はそれぞれ分散してその地を領地

としていました。

国衆は守護の被官です。制度上は守護の家来ですが、絶対的に服従はしていません。守護は軍事指揮権と幕府の判決の執行はおこない、守護段銭として臨時の徴税権を持っています。年貢の徴収権は領主である国衆が持っています。

国衆を味方にして外様の家来にし、更に譜代の家来へと編入して行かなければ強い軍団はできません。

話をもどってこの関東の分裂闘争は古河公方と京の義政将軍との闘争でもありました。

しかし京では応仁乱が勃発します（1468～1477年）。関東の騒乱どころではありません。

この間関東では古河公方 VS 山内上杉・扇谷上杉・堀越公方連合との対決は続きます。

28年続いてきたこの騒乱は、応仁の乱が終り、足利義尚^{よしひさ}将軍（義政将軍の息子）と古河公方足利成氏とが和解することになり、両上杉氏と堀越公方も古河公方と和解します（1482年）。

結局上記のそれぞれの支配領域は当初の四分裂地域とほとんど変わりません。勢力が均等したままでの和解です。

② 長享^{ちようきやう}の乱一両上杉氏の抗争

しかしその後関東は安定期に入りませでした。

上杉氏の中で山内上杉^{やまのうち}（関東管領家）と扇谷上杉^{おうぎがやつ}が対立し、抗争を始めます（長享の乱—1487～1505年）。

扇谷上杉氏には古河公方が味方します。抗争は続きます。

この間、太田道灌^{かさい}を家宰（家老）とする扇谷上杉の勢力が延びてきたことが挙げられます。太田道灌は戦に強いのです。

太田道灌のその勢力増大に危機を覚えた主君扇谷上杉定正^{さだまさ}は道灌を暗殺します（1486年）。

歌詠みで知られていますが、戦に強い武将であり、政治家として辣腕を

ふるいました。

古河公方が扇谷上杉方より山内上杉氏方に変わり、そして扇谷上杉が山内上杉氏に降服して長享の乱は終わります（1505年）。山内と扇谷の両上杉は仲直りしたのです。

3、北条氏（伊勢氏）の登場

そして両上杉氏抗争中に伊勢宗瑞が初めて関東に登場します。

この伊勢宗瑞の北条氏が戦国時代の後半関東の中心地を支配することになります。そして豊臣秀吉によって滅亡されるまでです（4代氏政・5代氏直—1590年）。

① 伊勢宗瑞の登場

宗瑞は伊勢新九郎宗瑞（1456～1519年）が正式名です。早雲庵宗瑞から俗称北条早雲と呼ばれますが、北条の氏名は2代氏綱が改名して以後名乗ります。ですから北条早雲は在世中は伊勢宗瑞です。

幕府の政所執事伊勢氏の傍系で備中の出身です。ですから足利将軍家直臣家来筋です。政所執事は室町幕府の財政担当の長官です。

姉が今川義忠（当主）に嫁いでいたので駿河の今川氏に身を寄せることになりました。

今川家の後継ぎのお家騒動で姉の子の氏親に味方し、氏親が当主になった暁に駿河国の東端の一部に所領をもらったのが戦国武将としての初登場です（1487年—文明19年頃）。

② 伊勢氏の急成長—初代宗瑞、2代目氏綱時代

その後堀越公方家のお家騒動に便乗して当主の茶々丸を追討して伊豆一国を支配してしまいました（1493年）

堀越公方家は滅亡です。

伊勢宗瑞が関東で伊豆一国を支配する一勢力となったのです。

戦国大名として名乗りをあげたと言えるでしょう。

伊勢宗瑞^{そうずい}が伊豆国制圧後、伊豆国の東側の相模国^{さがみ}を有力領主大森氏から相模国を奪い取ります（1516年－永正13）。

古河公方家は家督騒動から古河公方家から新たに小弓公方家^{こゆみくぼう}ができます。小弓公方は古河公方支配の下総の南部を奪取します（1518年－永正15）。

これで関東中心部（武蔵国、上野国、下野国、下総国、上総国、相模国、伊豆国）の争奪戦には山内上杉氏、扇谷上杉氏、古河公方に新たに伊勢氏（北条氏）と小弓公方が加わります。

伊勢宗瑞（早雲）は死没（1519年－永正16）しますが、その息子2代目氏綱が本拠を小田原に構え、氏名も北条に変え、武蔵国に進撃を開始します。

氏綱は江戸城を奪取し、扇谷上杉氏支配の武蔵国南部を制圧します。

氏綱は駿河国（今川領）の富士川以東をも占領します。

今川氏は西部の遠江、三河方面に進出のため、武田氏は信濃への進出のため両者は同盟を結びます（駿甲同盟－1537年）。

駿は今川氏本拠地の駿河、甲は武田氏本拠地の甲斐の頭文字です。

北条氏綱は小弓公方（下総国南部）を滅亡させます（1538年－天文7）。

ここで氏綱は没し3代氏康の登場です（1541年－天文10）。

北条氏の支配地はゼロから二代で伊豆国、相模国、武蔵国半国、駿河国富士川以東、下総国の一部まで制覇します。

3代氏康も勇将です。後記します。

4、東日本の今川・武田・上杉（長尾）・北条体制時代

①四傑時代の到来

戦国時代には数多くの勇将が現れます。

後掲の「四将の在世比較表」を参照ください。

しかし16世紀半ばに東日本で勇名を馳せたこの戦国大名たちは特別で、歴史に名を残します。

武田信玄、上杉（長尾）謙信、北条氏康で三傑と言えるのですが、この人も入れて四傑にしましょう。今川義元です。

同時代の人で、互いに領地拡大、あるいは天下取りに励みました。

戦略的（戦に強い）に優れていることはもちろんですが、政略的（同盟締結と破棄等）に巧みです。

この4人はほぼ同時期に親の死没あるいは親を追放（武田信玄）で地盤を引き継ぎ、戦国大名として実権を振るった当主でした。

それではこの4人の絡み合いを見て、誰が一番強かったのかを想像してみます。

1541年（天文10）に武田信玄（甲斐国＝山梨県）は父親を駿河国（静岡県）の今川氏に追い出して家督を勝ち取ります。

東隣の信濃国（長野県）へ攻め入ります。親の代になせなかった信濃国の南側の支配に成功します。信玄の名が近国に聞こえてきます。

同年に北条氏康は親の氏綱の死没で家督（3代目）を継承して実権を得ます。

氏康は山内。扇谷両上杉連合と対戦し完勝します（川越合戦—1546年—天文15）。

おうぎがやつ扇谷上杉氏は滅亡します。武蔵国東部も北条氏支配になります。

このころ関東圏ではありませんが、越後国（新潟県）は元は上杉氏の守護国でしたが、かさい家宰（家老）の長尾氏が上杉氏を追い出し長尾氏の支配になっていました。

北条氏康に負けた山内上杉氏（のりまさ憲政—関東管領）は武蔵国から支配地の上野国に逃げ、更に長尾氏を頼って越後国に逃げました。

山内上杉氏も実質滅亡です（1552年—天文21）。

氏康は親から継承した支配地は伊豆国（静岡県）、相模国（神奈川県西部）、武蔵国（東京都、埼玉県、神奈川県東半分）の南部、駿河国の

富士川以東でした。

氏康は自分の代で、武蔵国の全地域を支配、下総国の北部を支配、新たに上野国それに下野国の南端をも支配します。

^{しもふさ}下総の古河公方は北条氏の手の内あります。

ちょうどその頃越後では実質支配者長尾氏（山内氏の元家宰＝家老）内で家督騒動があり、景虎（謙信）が兄を隠退させ家督を奪い取りました（1548年—天文17）。

越後国を地盤とする長尾景虎謙信の登場です（1530～78年）。17年）です。

謙信が家督を継いだ時は未だ氏名は長尾でした。

ところが武蔵、上野から越後に逃げ、謙信に庇護されていた関東管領の上杉憲政が上杉の家督（名称と関東管領職）を謙信に譲ることにするのです。

これは後年の1561年（永禄4）に北条氏の小田原城を謙信が攻めた時に行われました。

これ以降謙信は名門上杉の氏名を名乗ります。

ですから江戸時代まで続いた大名上杉氏は室町時代の名門上杉氏とは血統的にはつながっていません。

関東中央部での北条3代目氏康の制覇が決まりそうになります。

しかしそうは行きませんでした。

謙信が上野国（群馬県）や武蔵国（東京都、埼玉県）に侵攻してきます。

逃げてきた山内上杉憲政（上野国・武蔵国守護）を形の上で頂いていますので、関東への侵攻の正当な理由が成り立ちます。

もう一人は今川義元です（1519～60年）。1536年（天文5）に家督を継ぎます。

先代から受け継いだ支配地は駿河国（静岡県中部・東部）と遠江国（静岡県西部）です。

三河国（愛知県東部）は尾張の織田氏、地元の松平氏と抗争中でしたが、義元が制しました。

東日本の後期戦国時代はこの四傑の絡み合いです。

武田信玄と上杉謙信は信濃国（長野県）の中部・北部・東部の争奪戦で幾度も干戈を交えます。川中島合戦で有名です。数度の戦いでも勝敗はつきません。

仲裁には今川義元がたちますが決着はつきません。

謙信と北条氏康の関係は上記のように謙信が氏康支配の上野、武蔵に毎年のように攻勢をかけてきます。

氏康は防戦に必死です。

今川義元と北条氏康との関係です。

北条氏は今川氏の元家臣で、義元家督争いでも義元に協力してきました。

両者は仲がよく、姻戚関係にありました。

しかし義元が武田信玄と結びついて駿河国東部の支配をめぐる抗争になります。これは先代の氏綱時代の途中から氏康時代にかけてです。

北条氏康と武田信玄との関係です。

信玄の甲斐国（山梨県）とは相模国（神奈川県西部）武蔵国（東京都、埼玉、神奈川県東部）、で国境を挟んでいます。

それまで大きな抗争はなかったのですが、信玄は先代以来からの義元との同盟で氏康支配地を脅かす存在です。

今川義元と武田信玄との間は信玄とは信玄が追放した父親を預けるくらいの親密さです。信玄の嫡男義信の正妻は義元の娘です。

②甲相駿三国同盟

上記①のような関係にある中で甲斐の武田（信玄）、相模の北条（氏康）と駿河の今川（義元）の間で同盟が結ばれます。それぞれの主要な支

配地名の頭文字をとって甲相駿三国同盟とっています。

上杉謙信は仲間外れです。

後掲の「同盟関係図－三国同盟」を参照ください。

同盟後の四傑のその後の展開です。

今川義元は北の信玄・東の氏康の両者に安心して西の織田信長の尾張への侵攻をかけます。

しかしご存じのように桶狭間の戦いで信長に大敗戦して、首を取られます（1560年－永禄3）。まさかの展開でした。

ここで直ぐに今川氏が滅亡したわけではありません。

謙信は毎年のように関東に攻め込んできます。

北条氏康は謙信に攻められ小田原城で防戦します。謙信がすぐに越後の帰還して事なきを得ますが、敗戦です（1561年－永禄4）。信玄は助けてくれませんでした。

この小田原城攻めの時に上記しましたように上杉憲政から上杉の名と関東管領職を譲られ、いよいよ関東侵略の口実を正当化します。

しかし武蔵国、上野国で防戦する氏康ですが北条氏が大勝することもありました。

下総の白井城で上杉方は大敗しました（1566年－永禄9）。

武田信玄は第4次川中島合戦で上杉謙信に勝ち（1561年）、信濃国全域を支配します。

事実上の川中島最終合戦と言われ、両者引き分け説もありましたが、戦い後の信玄の信濃の支配が確定しており、信玄の勝ちとの説が定説になってきています。

さらに信玄は上野（群馬県）の西部も制圧します。

上野国は北条氏と上杉氏で分けていた情勢でした。そこに信玄も入ってきました。

武田信玄、北条氏康、今川義元にとって三国同盟の果実は誰が得たのかです。

信玄は謙信が北条攻めで軍団を分散させることになり、信濃の川中島合戦を有利に進めました（合戦に勝利）。

氏康は謙信との防戦に必死でした。

義元は織田信長に桶狭間でまさかの不覚。

三国同盟は信玄の一人勝ちと言えるでしょう。

③三国同盟の解消と越相同盟

ところが信玄が三国同盟を破棄して更なる戦略に出ます。

信玄は織田信長と徳川家康（三河）と同盟して今川氏真^{うじまね}（敗死の義元の息子）を攻めます。義元の敗死で駿河を侵略やすしと見たのです。

北条氏康は今川氏の救援のため進軍しますが、氏真を助けられず氏真は信玄に敗れます。

後掲の「同盟関係図一相駿同盟」を参照下さい。

室町幕府守護大名の名門今川氏は滅亡します（1569年—永禄12）。

戦国史から退場です。

父親義元が桶狭間の戦いで敗死した9年後です。

信玄は駿河国（静岡県）と遠江国（静岡県）の東半分を獲得します（西半分は徳川家康が確保）。

後掲の「関東・中部の戦国大名勢力図（1578年）」を参照ください。

信玄の今川氏侵略で甲・相・駿の三国同盟は解消となります。

北条氏康は信玄を脅威と見て、上杉謙信と同盟を結びます。

後掲の「同盟関係図一越相同盟」を参照ください。（越相同盟—1569年、越は越後、相は相模）。

氏康の息子（跡取り氏政の弟、後に景虎を名乗る）が謙信の養子となります。

謙信の跡取りの意味ではなかったでしょう。むしろ人質でしょう。

これに対し信玄は昨日の友は今日の敵と北条氏攻撃を仕掛けます。小田原城は囲まれますが、落ちません。信玄は数日で引き上げます。しかし戦いは北条氏康の負けです（1569年—永禄12）。

④越相同盟解消で甲相同盟

その後北条氏康は死没し（1571年一元亀2）、4代としてその息子^{うじまさ}氏政が当主になります。

東日本の四傑の内、今川義元、北条氏康が亡くなります。

北条氏の新当主氏政は信玄強しと見たのか、謙信との同盟を解消して再び信玄と同盟を結びます。

後掲の「同盟関係図一甲越同盟」を参照ください。

（1571年一甲相同盟、甲は甲斐で武田、相は相模で北条）。

小田原城を信玄に囲まれた時謙信は援軍を差し向けてくれなかったこと、謙信のこれまでの勢いに陰りを感じてのことでしょう。

氏政の弟景虎はそのまま越後の謙信の元にいます。養子とは言え人質です。戻されるのが普通ですが、謙信は養子のままにしていました。

謙信が何を考えていたのか分かりません。未だ対北条で役に立つと考えたのでしょうか。景虎が大事にされていたことは分かります。

この同盟で信玄は北条氏（氏政）が謙信を牽制してくれることで、徳川家康の遠江国、三河国からさらに尾張（織田信長）に向け進軍を始めます（京をめざしたかどうかは分かりません）。

家康との三方ヶ原合戦のほか全戦全勝で勝ち進んだ信玄軍だったのですが、途中信玄は病を得て陣中で没してしまいます（1573-天正元）。

四傑の内三傑が亡くなりました。

信玄が亡くなっても信玄の後継者の武田勝頼と北条氏政の甲相同盟は続きます。

そして上杉謙信が後継の家督を決めずに病没します（1578年一天正6）。

上杉氏内部では北条氏からの養子景虎と謙信の甥（姉の子）の景勝で家督を争いがあり、景勝が勝って後継になります。

北条氏政は関東で他に戦があり、弟の景虎を援護出来ませんでした。

武田勝頼は北条氏と同盟があるにも関わらず、景虎に味方せず、景勝に味方しました。

これで武田氏と北条氏との甲相同盟は解消です。

武田勝頼と上杉景勝とで甲越同盟が結ばれます。

後掲の「同盟関係図―甲越同盟」を参照ください。

これで戦国東日本の雄であった今川義元、北条氏康、武田信玄、上杉謙信の四傑が没します。

5、四傑死没後の四氏のその後

四傑が死没し、上杉景勝が上杉家の家督を継いだ時（1579年）、中央では織田信長の勢いは止まりません。徳川家康と同盟し、近畿地方、美濃、尾張、三河、遠江、越前、加賀、能登を制圧しています。

武田勝頼と上杉景勝は信長に対抗しています。

北条氏政は甲越同盟（武田・上杉）に対抗して信長に服属することにし
ます。

氏政は武田・上杉連合には信長に臣従して対抗するしかないとの判断だ
ったのでしょう。

勝頼と景勝は信長と対抗中で北条氏への侵攻はできません。

上杉景勝は信長軍（柴田勝家）と越中（富山県）で防戦します。

武田勝頼は織田信長に攻め込まれ敗戦、勝頼は自刃、武田氏は滅亡しま
す（1582年3月―天正10）。

信長は、すでに大坂の本願寺は降伏させており、毛利氏も備中岡山で降
服間近かで、九州の有力大名や奥羽の有力領主も信長に服属の意向が出さ
れていたその時、明智光秀に謀反を起こされます。信長が謀殺（自刃）さ
れます（本能寺の変―1582年6月）。

この後は豊臣秀吉の天下になり、上杉景勝は秀吉に臣従します。

北条氏政も秀吉に服属し、伊豆国、相模国、武蔵国、上野国の南部、下
野の西部、下総国の支配を続けます。

しかし北条氏政は徳川家康の仲介にもかかわらず最終的には秀吉に反抗
して滅亡します（小田原合戦―1590年―天正18）。

後はご存じのように関東は徳川家康の支配となります。

四傑のお家で残ったのは上杉氏（長尾氏）だけです。

上杉景勝は信長死後、豊臣秀吉に臣従しますが、関ヶ原合戦で石田三成に味方して敗戦、何とかお家は存続しますが、120万石が15万石になって明治を迎えます。

四傑は先代の親より地盤を引き継ぎ、傑出した戦術、戦略巧者で天下を狙える勇将と見られていましたが、一代で天下は難しく次代に託しましたが、信長、秀吉、家康の力には及びませんでした。

信玄と信長の対決は信玄の病死でかないませんでした。

6、四傑の中で誰が一番強かったか

さて最後にこの四傑の勇将で誰が一番強かったのかを評価してみましょう。

今川義元は武田信玄と共同で北条氏綱に対戦しましたが、たいして成果はありません。

それに織田信長に桶狭間で大敗戦死は早くも候補から脱落です。

北条氏康は武蔵国や下総国での侵略で強さを見せ、両上杉氏や古河公方を滅亡させた強さは特筆されます。对上杉謙信で勝ったことはあり、支配はされませんでした。たびたび武蔵に侵攻をゆるし、氏康は小田原城を包囲されたことがあります。

上杉謙信は越中国（富山県）への侵略や上野国への侵略では実績が上がっています。

しかし信玄との信濃支配での川中島での戦いは実質敗戦しており、又遠征の下総の白井城で氏康に大敗を喫しています。

武田信玄です。謙信には川中島の戦いで勝利し、駿河、遠江の侵攻に成功し、氏康の小田原城を一時包囲したこともあり、その折氏康軍にかなりの損傷を与えています。

三方ヶ原の合戦では徳川軍に大勝しています。

こうなりますとやはり一番強かったのは武田信玄ということになるでしょう。

織田信長との対決がもしあったらどうだったでしょうか。

歴史はなんともはや見たいところを見せてくれません。

<まとめ>

東日本の関東の戦国時代は前期15世紀中ごろは足利氏（鎌倉公方・古河公方）と上杉氏（山内関東管領と扇谷上杉）の攻防で、16世紀初めからの戦国中盤では北条氏が現れ台頭し、16世紀中ごろには上杉氏（関東管領家）と足利氏は歴史から退場です。

その後の戦国後期では越後の長尾氏（後の上杉氏）、武田氏（甲斐）の関東中央部への侵攻で関東中央部は北条氏を中心とする激戦区となります。

東日本は今川義元、北条氏康、武田信玄、上杉謙信の四傑の戦闘と同盟で領域拡大に励みます。

しかしかれらが順次死没後は戦国時代末期に入ります。

その息子たちの時代になります。

彼らは織田信長、豊臣秀吉、徳川家康の攻勢の前で先祖の領域をどう残すかでした。

四氏のうち江戸時代まで大名家として残ったのは上杉氏（長尾氏）だけです。

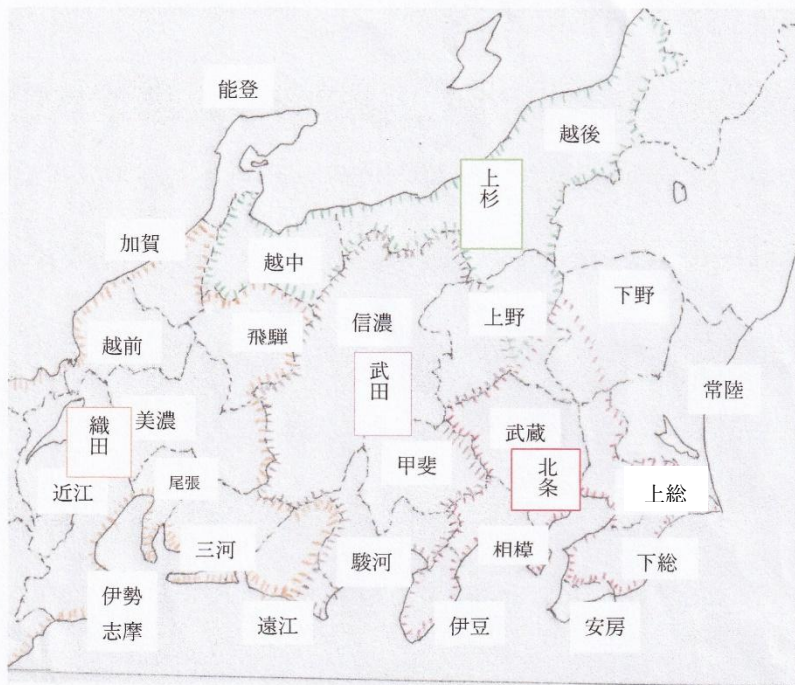
以上

2024年8月5日

梅 一声

文献資料

- 1, 戦国関東の覇権戦争 黒田基樹 2011 洋泉社
- 2, 戦国北条一族 黒田基樹 1005 新人物往来社
- 3, 鎌倉府と関東 山田邦明 1995 支倉書房
- 4, 日本時代史12 戦国の地域国家 有光友学編 2003 吉川弘文館
- 5, 早稲田大学エクステンションセンター 2023年秋講座 東日本の戦国時代
池淳 配布資料



関東・中部の戦国大名勢力図（1578年）

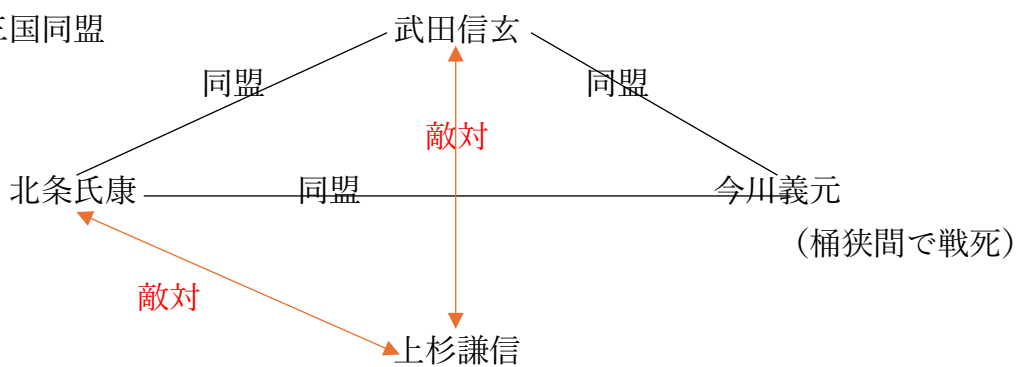
- 点線：国境
- 赤斜線：北条氏勢力
- 緑斜線：上杉氏勢力
- 紫斜線：武田氏勢力
- 茶斜線：織田氏勢力

戦国関東の年表

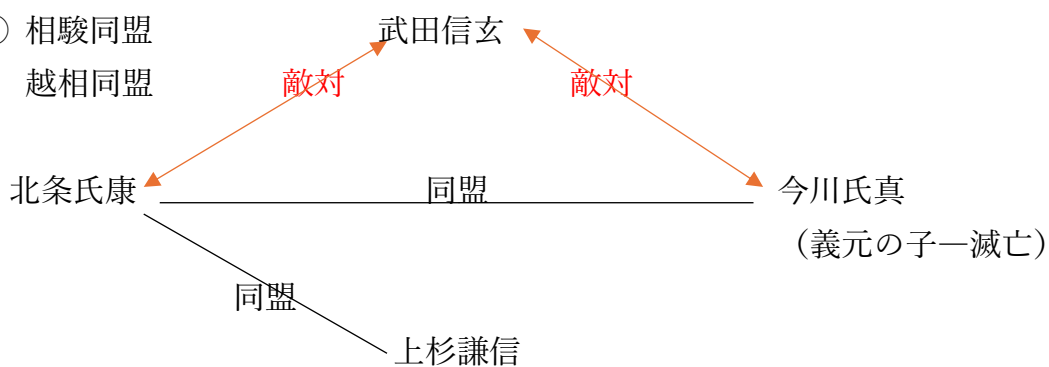
1416	応永13	上杉禅秀の乱	関東管領上杉氏憲(禅秀)、鎌倉公方持氏への反乱、幕府の支持を得て持氏派の勝利
			犬懸上杉失墜、山内上杉関東管領世襲
1438	永享元	永享の乱	鎌倉公方持氏の反乱、関東管領山内上杉憲実は諫止、義就將軍が討伐、持氏自害
			憲実は出家隠退
1440		結城合戦	持氏の遺臣が遺児安王丸・春王丸を擁して挙兵、敗れる
1447	文安4	成氏、公方就任	持氏の遺児の成氏を関東公方として鎌倉に派遣(管領細川勝元)
			成氏と上杉氏対立
1454	享徳3	享徳の乱の始まり	関東管領上杉憲忠が成氏に誅殺され、上杉方が成氏を攻撃
1455	享徳4		幕府の指示で駿河守護今川範忠鎌倉制圧
			成氏は下総古河へ移転
1458	長祿2	堀越公方の誕生	義政將軍は弟の政知を鎌倉公方として派遣、鎌倉に入れず、伊豆堀越に居館を構える
1467	応仁元	応仁の乱	1477年(文明9)乱終わる
1482	文明14	享徳の乱終り	幕府・上杉と古河公方は和睦(都鄙和睦)
1486	文明18	太田道灌暗殺	扇谷山内の家宰の道灌は主人の定正に謀殺される
1487	長享元	長享の乱始まり	山内上杉と扇谷山内の対立、山内顕定(関東管領)・上杉房定(越後守護) vs
			扇谷定正・足利政氏
			扇谷定正が優位に進行
1493	明応2	伊勢宗瑞侵攻	宗瑞(早雲)、堀越公方茶々丸を追討、伊豆支配、後に北条氏を名乗る
1494	明応3	扇谷定正落馬死	
1504	永正元	古河足利政氏	扇谷方より山内方に変わる
1505	永正2	長享の乱終り	扇谷上杉、山内上杉に降服
1510	永正7	関東管領顕定敗死	越後の長尾為景のため自刃
1516	永正13	宗瑞相模制圧	伊勢宗瑞(早雲)相模(扇谷上杉支配)を制圧
1518	永正15	小弓御所	足利義明(古河公方高基の弟)が下総小弓で小弓公方を名乗る
1519	永正16	早雲(宗瑞)没	
		北条本拠を小田原へ	2代氏綱は本拠を伊豆韮山から小田原城に移す
		北条を名乗る	氏綱は氏名を伊勢より北条に変える
1524	大永4	北条、江戸城奪取	北条氏綱(2代目)江戸城(扇谷上杉)を奪取、武蔵国南部制圧
1537	天文6	駿甲同盟	今川と武田同盟、氏綱駿河の富士川以東を占領
1538	天文7	小弓公方家滅亡	北条氏綱、下総国府台で小弓公方足利義明を討つ
1541	天文10	武田信玄実権争奪	信玄、父の信虎を駿河に追放
		北条氏綱没	3代目は氏康
1546	天文15	北条v両上杉	川越合戦、北条氏康勝利、古河公方晴氏隠退、後継の藤氏の母は氏康の妹
1548	天文17	扇谷上杉滅亡	北条氏によって
		謙信家督	兄の長尾春景が引退して弟の景虎(謙信)が家督
1550	天文19	北条v山内上杉	北条氏康武蔵の北部山内支配地を攻略
1552	天文21	山内上杉滅亡	山内上杉憲政(関東管領)は上野も追われ越後の長尾景虎の元に逃げる
1552	天文21	三国同盟	武田信玄、北条氏康、今川義元、で同盟(甲相駿三国同盟)
1560	永祿3	桶狭間戦い	今川義元、桶狭間で織田信長に負け、戦死
1561	永祿4	謙信、小田原城攻撃	長尾景虎(後の上杉謙信)、関東に進撃し北条の本拠地小田原城を攻める
			謙信は上杉家家督を譲られる。以後上杉謙信
		第4次川中島合戦	激戦で信玄が勝利説、信濃国全土を支配
1562	永祿4	古河公方退去	足利藤氏公方、古河を退去(小田原で捕虜)、古河公方家断絶
1566	永祿9	信玄関東侵攻	西上野制圧
		謙信敗北	下総臼井城(佐倉市)で北条方に敗北、下総、武蔵野諸将の離反続く
1568	永祿11	信玄駿河侵攻	信玄、三国同盟破棄、駿河の今川氏真を攻める。氏真、掛川に逃げる
1569	永祿12	今川滅亡	今川氏真、北条に引き取られる
		上杉と北条同盟	越相同盟、氏政の弟が謙信の養子
		上杉・北条v武田	信玄、小田原城攻撃
1571	元龜2	北条氏康没	4代は氏政
		甲相同盟	越相同盟解消し信玄と氏政同盟、養子(氏政の弟景虎)はそのまま越後
1573	天正元	信玄没	武田信玄遠江(徳川家康)進軍中に病没、後継は勝頼
1578	天正6	謙信没	養子景勝と景虎で後継者争い
1579	天正7	上杉後継者は景勝	北条氏政は景虎の援護できず、武田勝頼は景勝を支援し景虎自刃
		甲越同盟	甲相同盟解消、武田勝頼と上杉景勝が同盟
1582	天正10	武田滅ぶ	織田信長に攻められ自刃
		織田信長自刃	本能寺の変
1590	天正18	北条滅亡	豊臣秀吉に小田原城を攻められて滅ぶ(氏政-氏直)

同盟関係図

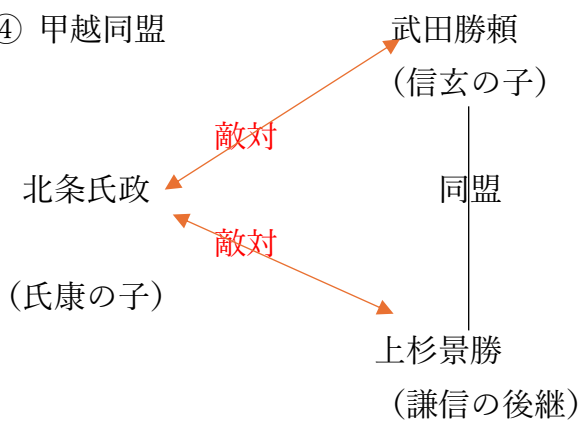
① 三国同盟



③ 相駿同盟 越相同盟



④ 甲越同盟



		北条氏康		今川義元		武田信玄		上杉謙信		(織田信長)	
		在世	実権	在世	実権	在世	実権	在世	実権	在世	実権
1515	永正12年										
1516	13年										
1517	14年										
1518	15年										
1519	16年										
1520	17年										
1521	大永元年										
1522	2年										
1523	3年										
1524	4年										
1525	5年										
1526	6年										
1527	7年										
1528	享禄元年										
1529	2年										
1530	3年										
1531	4年										
1532	天文元年										
1533	2年										
1534	3年										
1535	4年										
1536	5年										
1537	6年										
1538	7年										
1539	8年										
1540	9年										
1541	10年										
1542	11年										
1543	12年										
1544	13年										
1545	14年										
1546	15年										
1547	16年										
1548	17年										
1549	18年										
1550	19年										
1551	20年										
1552	21年										
1553	22年										
1554	23年										
1555	弘治元年										
1556	2年										
1557	3年										
1558	永禄元年										
1559	2年										
1560	3年										
1561	4年				(41歳)						
1562	5年										
1563	6年										
1564	7年										
1565	8年										
1566	9年										
1567	10年										
1568	11年										
1569	12年										
1570	元亀元年										
1571	2年										
1572	3年		(57歳)								
1573	天正元年										
1574	2年					(52歳)					
1575	3年										
1576	4年										
1577	5年										
1578	6年										
1579	7年							(48歳)			
1580	8年										
1581	9年										
1582	10年										(49歳)